# 「玄舟顕彰の碑」について

| 整理番号 | 題額 | 題額揮毫 | 碑記撰文 | 碑記揮毫 |
|---|---|---|---|---|
| 浦和〇八 | 誓蓮社願譽上人讃阿惠乗玄舟老和尚 | 猛譽歡進 | 昇譽龍畢 | 猛譽歡進 |

| 鐫刻 | 撰文建碑年 | 住所 | 場所 | 備考 |
|---|---|---|---|---|
| — | 一九〇一・明治三四 | 桜区宿 | 観音寺 | |

## 一．はじめに

本石碑は、観音寺の十六世住持である玄舟について、存命中にその功績と人徳とを称えたものである。

〇写真１　石碑正面

○写真２　石碑背面

○写真３　「碑記」部分

## 二．翻刻並に訳注

■翻刻

（正面）

◎題辞：楷書体　右から左へ

世六十山當

◎碑題：楷書体　上から下へ

誓蓮社願譽上人讃阿惠乘玄舟老和尚

（戒名の両脇に筆子十七名の連名あるも、かなり摩滅）

（背面）

◎碑記

巍々如喬嶽淼々似洪海仰瞻尊顔則苦患釋然而解俯接寶足則罪愆忽爾而散光照十方盡破迷闇悲憫五趣齊拔惱害萬化隨機一身應物靡不適宜是即觀音薩埵之威神功德者也矣經曰一切如來之大悲悉集觀音菩薩之一躰嘻非因圓而深果滿而高焉能得如是耶爰當山第十六主願譽玄舟上人者與放譽瑞光哲林尼夙歸命薩埵恭敬供養有年於茲然而誓周拜薩埵之靈塲明治廿七年孟冬振錫西國之芳蹤祥瑞彌深感應頻臻翌年晩秋歸錫爾後道念不禁瞻仰難抑乃刻其尊像三十三體而安置之當山及大泊安國寺桑崎天然寺三處二十九年更飛錫於坂東秩父靈跡無處不拜焉健鞋數百里曾無遭災厄凡四閲春秋終成滿素願將有報其恩而利益群生也遍勸有縁募浄財刻尊像六十七軀奉安之當山所謂百躰大悲薩埵是也卜三十三年三月廿五日請道會俗以修慶讃法會可謂二利圓滿之擧也頃者上人學生欲及其存而立石於境内以勒其德業不肖龍學亦蒙上人之知久矣於是乎作之樓槩鏤之碑陰伏冀慈光朗照悲手遍攝現當二世長享福樂謹誌

明治三十四辛刄丑年九月佛日

弟子　舛譽龍畢　識

猛譽歡進　書

●異体字など

○愆　愆。　○溪　深。　○悉　悉。　○菊　第。　○樓　梗。　○刄　丑。

○舛　昇。

■訳注

◎碑記

●本文（いわゆる旧字体とし、一行毎に改行した）

巍々如喬嶽、淼々似洪海。
仰瞻尊顔、則苦患釋然而解、
俯接寶足、則罪愆忽爾而散。
光照十方、盡破迷闇。
悲憫五趣、齊拔惱害。
萬化隨機、一身應物。
靡不適宜、是即觀音薩埵之威神功德者也矣。
經曰、一切如來之大悲、悉集觀音菩薩之一躰。
嘻、非因圓而深、果滿而高焉。能得如是耶。
爰當山第十六主願譽玄舟上人者、與放譽瑞光哲林尼、夙歸命薩埵、恭敬供養有年於茲。
然而誓周拜薩埵之靈場。
明治廿七年孟冬、振錫西國之芳蹤、祥瑞彌深、感應頻臻。
翌年晩秋、歸錫。
爾後道念不禁、瞻仰難抑。
乃刻其尊像三十三體、而安置之當山及大泊安國寺桑崎天然寺三處。
二十九年、更飛錫於坂東秩父靈跡、無處不拜焉。
健鞋數百里、曾無遭災厄。
凡四閲春秋、終成滿素願。
將有報其恩而利益群生也。
遍勸有縁、募淨財、刻尊像六十七軀、奉安之當山。
所謂百躰大悲薩埵是也。
卜三十三年三月廿五日、請道會俗、以修慶讃法會、可謂二利圓滿之擧也。
頃者、上人學生、欲及其存而立石於境内、以勒其德業。
不肖龍學、亦蒙上人之知久矣。
於是乎、作之梗概、鏤之碑陰。
伏冀、慈光朗照、悲手遍攝。
現當二世長享福樂謹誌
明治三十四辛丑年九月佛日
弟子　昇譽龍學　識
猛譽歡進　書

●訓訳

巍々たること喬嶽の如く、淼々たること洪海の似し。
仰いで尊顔を瞻ればみ、則ち苦患釋然せきぜんとして解け、
俯して寶足に接すれば、則ち罪愆ざいけん忽爾として散ず。
光は十方を照らしあは、盡く迷闇を破り、
悲は五趣を憫れみ、齊しく惱害を拔く。
萬化まんげ機に隨ひ、一身物に應じ、適宜ならざるは靡なし。
是れ即ち觀音薩埵の威神いじん功德なる者なり。
經に曰く、

「一切如來の大悲は、悉く觀音菩薩の一躰に集まる」と。
嘻、因圓なること深く、果滿つること高きに非ざれば、能く是くの如きを得んや。
爰に當山第十六主願譽玄舟上人は、放譽瑞光哲林尼と與に、夙に命を薩埵に歸し、恭敬供養すること茲に年有り。
然して薩埵の靈場を周く拜せんことを誓ふ。
明治廿七年孟冬、錫を西國の芳蹤に振るへば、祥瑞彌々深く、感應頻りに臻る。
翌年晩秋、錫を歸す。
爾後道念禁ぜず、瞻仰抑へ難し。
乃ち其の尊像三十三體を刻して、之を當山及び大泊の安國寺、桑崎の天然寺の三處に安置す。
二十九年、更に錫を坂東秩父の靈跡に飛ばし、處として拜せざる無し。
健鞋數百里、曾て災厄に遭ふ無し。
凡そ四たび春秋を閲し、終に素願を成滿す。
將に其の恩に報ひて群生を利益すること有らんとするなり。
遍く有縁に勸め、淨財を募り、尊像六十七軀を刻して、之を當山に奉安す。
所謂る、「百躰大悲薩埵」是れなり。
トして三十三年三月廿五日、道に請ひ俗を會し、以て慶讃法會を修む。
二利圓滿の擧と謂ふべし。
頃者、上人の學生、其の存すに及びて石を境内に立て、以て其の德業を勒せんと欲す。
不肖龍學も、亦た上人の知を蒙ること久し。
是においてか、之が梗概を作し、之を碑陰に鏤す。
伏して冀ふ、慈光の朗らかに照し、悲手の遍く攝らんことを。
現當二世、長く福樂を享け謹んで誌す。
明治三十四辛丑年九月佛日
弟子の昇譽龍學識す。
（弟子の）猛譽歡進書す。

**●人物**

○願譽玄舟上人　「觀音寺歴代上人」碑に、「十六世　誓蓮社願誉上人讃阿乗恵玄舟和尚　明治卅年九月　南埼玉郡大泊安国寺へ埋葬ス」とある。この文は、玄舟が明治三十年に安国寺に移ったことと、最終的に安国寺に埋葬されたことを言うか。また、現越谷市大泊の「安国寺歴代住職之墓碑」に、「二八世　願誉玄舟和尚　大正三年九月二十日寂」とある。

○放譽瑞光哲林尼　願譽の配偶だろう。觀音寺には、「明治十七年六字名号塔」があり、そこには「放譽瑞光哲林尼」の「辞世の歌」が記されている。

○龍學　「觀音寺歴代上人」碑に、「十七世　騰蓮社昇誉上人雲阿一乗海龍学老和尚　昭和二年三月十五日　六十九才　安国寺へ埋葬」とある。この文は、龍学が昭和二年に安国寺に移ったことと、最終的に安国寺に埋葬されたことを言うか。また、現越谷市大泊「安国寺歴代住職之碑」に、「二九世　昇譽龍學和尚　昭和三年・東京芝・真乗院転住」「三一世　昇譽龍學和尚　再任、昭和二十年三月十五日寂」とある。

○猛譽歡進　不詳。

●注

○巍巍　高く大きなさま
○喬嶽　高い山。特に泰山を言う。
○淼淼　水などの広々として限りないさま。
○洪海　洪は、大水。洪海の熟語はないが、大きな海のことだろう。
○瞻　尊んで仰ぎ見る。
○釋然　疑問や迷いがとけて心が晴れるさま。
○接足　接足作礼。古代印度の礼法のひとつ。足を額におしいただく礼拝。
○寶足　熟語はないが、宝玉のようにすばらしいおみ足、くらいの意味か。
○罪愆　罪、あやまち。
○忽爾　たちまち。
○十方　十の方向。東・西・南・北・東南・西南・東北・西北・上・下。
○迷闇　迷闇の心で、迷いの闇。
○悲　慈悲、苦しみを除くあわれみ。
○憫　あわれむ。
○五趣　五悪趣。西方浄土に対し、われわれが輪廻転生する五つの世界。地獄・餓鬼・畜生・人・天。
○惱害　なやましさまたげる、さまたげ。
○萬化　万物。ここでは万人か。
○隨機　仏が教えを説くにあたり、衆生の機（素質・能力）にしたがうこと。
○一身　身体の形が同様であること。同じであるもの、の意味か。
○應物　応機接物。相手に応じて正しい対し方をすること。
○觀音薩埵　薩埵は、菩提薩埵の略で、菩薩に同じ。觀音薩埵で、観世音菩薩。
○威神　神々しい威光、偉大なる威力。
○功德　すぐれた徳性、よい性質。
○經　不詳。
○因圓而深、果滿而高　*「因圓果滿」が深く高いこと。
＊因圓果滿　因位（いんに）（悟り以前の修行の時代）修行が具わって、証果（結果としての悟り）の徳が満足すること。
○歸命　自己の身命をさしだして仏に帰趣すること、帰依、帰順。
○供養　奉仕すること。
○有年　多年。
○明治廿七年　一八九四年。
○孟冬　十月。
○振錫　錫杖を振るう。諸国をめぐること。
○芳蹤　熟語は無い。蹤は、あしあと。先人の芳しいあしあと、くらいの意味か。
○感應　仏の慈悲が衆生にはたらきかけ、衆生がよくこれを感じ取り、互いに通じて交わりあうはたらき。
○翌年　明治二十八（一八九五）年。

○歸錫　帰還する。
○道念　仏道を求める心。道心。
○瞻仰　仰いで、尊敬恭敬すること。
○大泊安國寺　現、越谷市大泊の安国寺。
○桑崎天然寺　不詳。
○二十九年　一八九六年。
○飛錫　錫杖を飛ばす。諸国をめぐること。
○健鞋　鞋はくつ。熟語は無いが、健脚の意味か。
○閲春秋　閲は、経過する。春秋は、一年。
○成滿　達成する。
○素願　本願。ここでは、人の宿願で、秩父霊跡を巡礼しようという願いのことだろう。
○利益　他人を益すること。「利益衆生」で、世の人々のためになるようにすること。。
○群生　衆生。世界の人々。
○有縁　自己に縁のある人。
○淨財　世俗の人がきよらかな信仰によって布施、喜捨した物。
○慶讃　落慶に同じ。事の落成を喜び称えること。
○二利　上求菩提の自利と下化衆生の他利のふたつ。上に向かっては自らの悟りを求め、下に向かっては人々を導いて救う。
○上人　仏の弟子。浄土宗では、学徳のすぐれた高僧。
○學生　寺院に寄寓し、仏道を学ぶもの
○存　生存。
○勒　石に彫りこむ。
○慈光　仏のいつくしみの光明。衆生を守り導く慈悲の光。
○朗照　あきらかに輝く、あきらかに照らす。
○悲手　熟語はないが、慈悲の救いの手、だろう。
○現當二世　現在の座主の子ども、ということか。
○福樂　熟語は無いが、幸福と安楽くらいか。
○明治三十四　一九〇一年。

**●口語訳**（小見出しは訳者が便宜的につけたもの）

**【玄舟上人の人物と徳性】**

その高く大きなことは泰山のごとく、その広々としてなにものをも受け入れることは大海のよう。

その尊顔を仰ぎ見れば、苦しみや憂いはさっぱりと解消して心が晴々とし、そのおみ足に触れることができれば、罪過ちはたちまち消えてしまう。

その光は四方八方上下のあらゆる方向を照らし、迷いの闇をことごとく打ち砕き、その慈悲の心は現世の五つの世界すべてに及んで、悩みや妨げをすべて取り去ってしまう。

人びとの様々な違いに対応し、かつ同じ人間として正しく導き、適宜でないことはない。

こうした上人のすぐれた人間性と徳性は、まさに、観世音菩薩の神々しく偉大な威力、すぐれた徳性に他ならない。

仏典にいう「あらゆる如来の大慈悲は、最終的に観音菩薩の一体に具現する」と。

ああ、修行が十分に深く具わって、結果としての悟りの徳が満足するものになったものでなければ、こうした境地には到り得ないであろう。

【玄舟上人の巡礼と仏像製作】

当山十六主である願譽玄舟上人は、法譽瑞光哲林尼とともに、はやくから観世音菩薩に帰依し、恭しく奉仕すること多年であった。そして観世音菩薩の霊場を周く礼拝することを誓願した。

【明治二十七年の西国巡礼と造仏】

明治二十七年十月、西国の先人の足跡を追って旅に出ると、めでたい兆しが降り、しきりに仏との交流交わりが実現した。翌同二十八年晩秋に、帰郷した。

それ以後も仏道を求める心は禁じ得ず、仏を振り仰いで尊敬する気持ちは抑えがたいものがあった。そこで仏の尊像三十三体を刻し、当山、及び越谷大泊の安国寺、並びに桑崎の天然寺の三箇所に安置した。

【明治二十九年からの秩父巡礼と造仏】

明治二十九年、さらに関東の秩父の霊跡を訪ね歩き、あらゆるところを礼拝した。数百里を踏破した健脚ぶりで、その間、災厄にであうことは全く無かった。四年の月日を経て、すべての霊跡を廻り、素志の本願を成就した。

そして仏の恩に報いんがため、衆生に対して御利益を与えようと考えた。

そこで、有縁の人びとに働きかけて浄財を募り、尊像六十七体を刻して、当山に奉安した。

（さきの三十三体とこのたびの六十七体とをあわせ）いわゆる「百体大慈悲菩薩」が実現したのである。

【百体菩薩落慶法会】

そこでよい日取りを選び、明治三十三年三月二十五日、仏教者や世俗の人びとを会して、落慶の法会を営んだ。

これこそ、みずからの悟りを求める利益と、衆生を導き救う利益との両方を同時に円満にする壮挙というべきであろう。

【寿蔵碑建設のくわだて】

このごろ、上人の弟子たちが、上人の存命中に石を本寺の境内に立てて、その徳業を石碑として残したいと考えた。不肖龍学も、また玄舟上人の知遇を得ることが久しいものである。そこで、ここでこの間のあらましをまとめて、碑陰に刻すこととあいなった。

伏してこいねがう、その慈悲の光がこの世を明らかに照らし、その慈悲の御手があまねく衆生に及ぶことを。

現当主の二代目である龍学、長く幸福と安楽を受け、謹んで記す。

【記録】

明治三十四年九月

弟子である昇譽龍学が文を撰した。

同じく弟子の猛譽歓進が字を書いた。

## 三．資料等

（一）「新編武蔵風土記稿」巻一五四　足立郡之二十　植田谷領

◎宿村：寺院
○観音寺
「寺領八石の御朱印を賜はれり、浄土宗、鴻巣勝願寺の末、開山の僧を玉念と云、寂年は詳ならず、本尊三尊彌陀を安ぜり、行基の作と云」

（二）「武蔵国郡村誌」巻之十二
◎宿村：仏寺
○観音寺
「縦四十六間横廿五間面積千百六十八坪村の北方にあり浄土宗本郡鴻巣宿勝願寺末派なり」

## 四．主な参考資料

**①翻刻**

・埼玉県教育委員会『埼玉県教育史金石文集　上』（埼玉県教育委員会、一九六八）

**②論文など**

・大熊松男編『聞き書き　大久保ものがたり』（さきたま出版会、二〇〇〇）

以上

二〇二四年一月　薄井俊二訳す